



会報 37 号坂下会員の原稿を編集する中で美しい手彫鳥切手 45 銭を見ながら、ふと、この切手は今の貨幣価値に換算してどのくらいの額面価格の切手なんだろうかと、また、外国料金表をみて今と比べるとかなり高額になるであろうことを想像し、現在の料金と具体的に比較してみたくなった。また、明治後期から戦前までの高額切手のイメージを把握したいと思った。

現在の貨幣価値に換算する方法としては郵便料金表から換算する方法があることから 27 回

切手教室で宮鍋会員が配付された郵便料金変遷表を参考に左下のようにグラフにしてみたが、手彫切手初期の料金は統一されていないので換算は難しい。そこで、消費者物価指数、公務員給与、うどん料金等から換算を考えたが、明治初期の資料が存在しなかったり、比較が昭和 30 年代であったり、意図する資料が見つからなかった。江戸、明治から現代までの価格資料が存在するのは米価であるので米価を明治初期の換算に使用し、米価と封書郵便料金の 2 つの側面から手彫切手均一料金時期以降の換算に使用した。(参考資料 三条信用金庫発行「天明後米 1 俵価格表」ほか)

封書郵便料金が現在の 80 円の料金に決まった 1994 年の米価 1 俵 16392 円と封書郵便料金 80 円を基本として過去のそれらの価格を何倍したら基本の値になるかを計算してみた。但し、明治初期の米価の変動が大きいので 7 年間の移動平均を算出した値を含めて右のグラフにしてみた。

グラフから 1910 年代始め (大正初期) まで

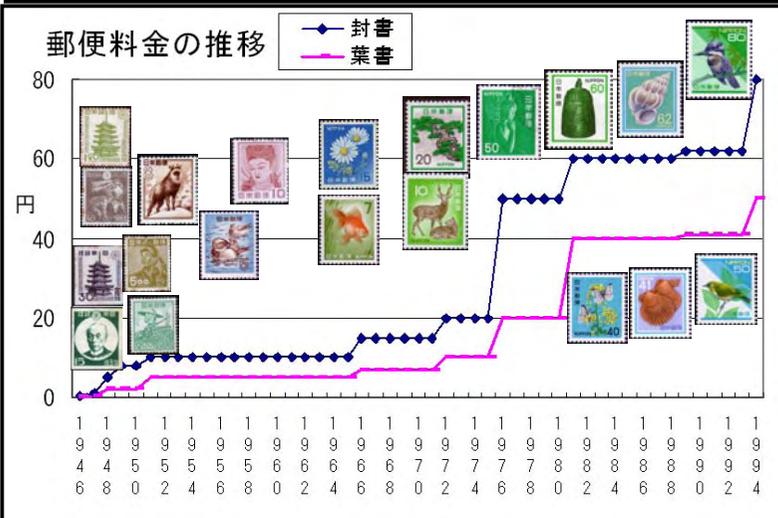
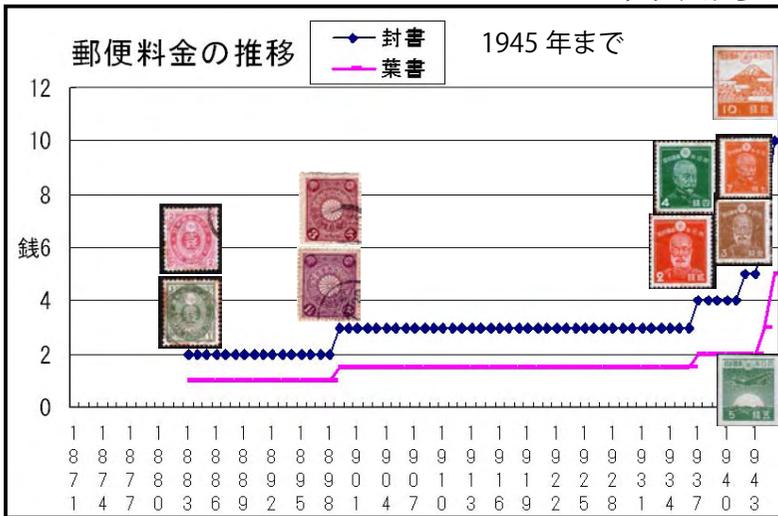
は米価に比べて郵便料金は低くなっていたのが、それ以後は一貫して郵便料金が米価より割高な料金になっていることである。当初は国策として郵便事業の発展のために後年と異なる料金に対する配慮をなしたのか興味ある傾向が見られた。

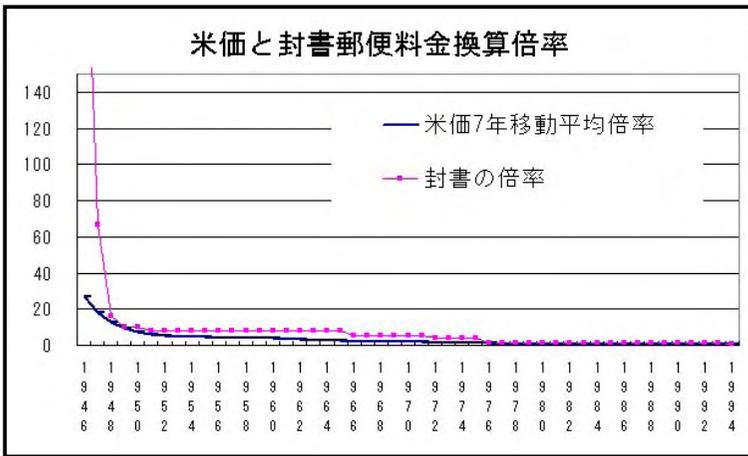
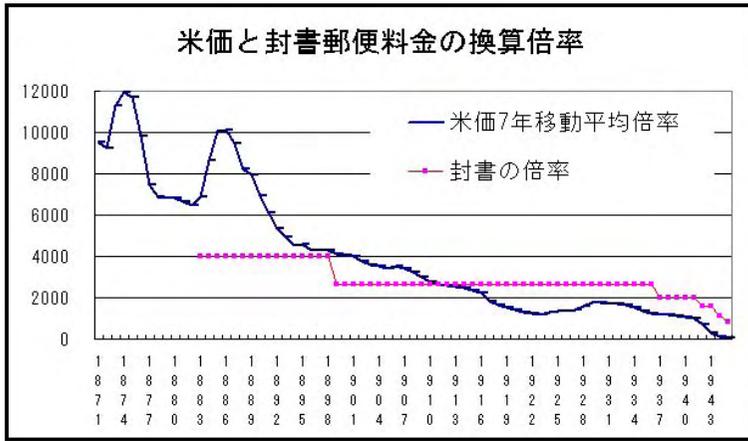
この 2 つの価格の倍率を主だった手彫、旧小判切手の額面を発行年の倍率で現在の価格に換算してみたのが表 1 である。

米価が非常に変動しているため移動平均でもやや矛盾する結果であったが、この時期の切手を見たとき、おおよそ数値を 100 倍した円を額面と考えておけばかけ離れたイメージを抱かずに済むのではないだろうか。

この結果を坂下会員の「創業期の郵便料金の変遷」の中に示された料金にあてはめてみた。

宛先別料金制時、東京一神奈川が 90 円から 300 円、静岡までが 500 円から 700 円、大阪までが 1500 円から 2000 円見当と考えられ、かなり高額な郵便料金だったと





と考えられた。  
距離別料金制になって、東京-大阪間は 400 文で 400 円から 550 円となるのであろうか。

これが 1873 年からの全国均一料金制では最低 2 銭であるので 200 円から 300 円が最低一律料金と考えらる。

次に、前号でふれられている外国郵便料金を考えてみたい。会報 37 号の 17 ページの表 1 外国郵便料金表をお借りして換算金額を記入してみたのが表 2 である。

当初はかなり高額であったものが UPU 加盟の時点では低額になって、わずか 2 年間で三分の一になっており、国内郵便の料金に照らすとやや低い感を抱くものである。またこのように換算してみて、あらためて現行料金表と比べヨーロッパへの料金が非常に割高になっていることを強く感じた。

次に、新小判切手以降に発行された高額切手の額面を換算してみたのが表 3 である。

表 1 主だった手彫、旧小判切手の額面換算結果

48 文		発行年	1871 年	換算額面価格	
		米価倍率	14636	73 円	
		平均米価倍率	9514	47 円	
		封書料金倍率	無し		
5 銭		発行年	1872 年	換算額面価格	
		米価倍率	20490	1024 円	
		平均米価倍率	9236	461 円	
		封書料金倍率	無し		
4 銭		発行年	1873 年	換算額面価格	
		米価倍率	13660	546 円	
		平均米価倍率	11296	451 円	
		封書料金倍率	無し		
6 銭		発行年	1874 年	換算額面価格	
		米価倍率	8765	525 円	
		平均米価倍率	11922	715 円	
		封書料金倍率	無し		
30 銭		発行年	1874 年	換算額面価格	
		米価倍率	8765	2629 円	
		平均米価倍率	11922	3576 円	
		封書料金倍率	無し		
12 銭		発行年	1875 年	換算額面価格	
		米価倍率	7996	959 円	
		平均米価倍率	11678	1401 円	
		封書料金倍率	無し		
45 銭		発行年	1875 年	換算額面価格	
		米価倍率	7996	3598 円	
		平均米価倍率	11678	5255 円	
		封書料金倍率	無し		
5 銭		発行年	1876 年	換算額面価格	
		米価倍率	13891	694 円	
		平均米価倍率	9826	491 円	
		封書料金倍率	無し		
5 厘		発行年	1876 年	換算額面価格	
		米価倍率	13891	69 円	
		平均米価倍率	9826	49 円	
		封書料金倍率	無し		
50 銭		発行年	1875 年	換算額面価格	
		米価倍率	6209	3104 円	
		平均米価倍率	6849	3424 円	
		封書料金倍率	無し		

表2 外国郵便料金表を換算

この表は書状1通15グラム(4匁)以下の主要国宛の料金を示す。

あて先	米国	上海	英国	ドイツ	仏国	イタリア
明治8(1875).1.1 ~ 8(1875).6.30	15 銭 1200 ~ 1800 円	6 銭 500 ~ 700 円	21 銭 1700 ~ 2400 円	21 銭 1700 ~ 2400 円	25 銭 2000 ~ 2900 円	25 銭 2000 ~ 2900 円
明治9(1876).1.1 ~ 9(1876).3.31	12 銭 1200 ~ 1600 円	6 銭 500 ~ 700 円	17 銭 1700 ~ 2400 円	17 銭 1700 ~ 2400 円	17 銭 1700 ~ 2400 円	17 銭 1700 ~ 2400 円
明治9(1876).4.1 ~ 10(1877).6.19	5 銭 500 ~ 700 円	5 銭 500 ~ 700 円	10 銭 1000 ~ 1400 円	10 銭 1000 ~ 1400 円	10 銭 1000 ~ 1400 円	10 銭 1000 ~ 1400 円
明治10(1877).6.20 (*2) 以降	5 銭 350 ~ 600 円	5 銭 350 ~ 600 円	10 銭 12 銭(*3) 700 ~ 1200 円			

\*1. U.P.Uの成立による \*2. 日本のU.P.U加盟による \*3. 香港經由料金

表3 新小判切手以降の切手のからの換算

3 銭		発行年	1883 年	換算額面価格	5 円		発行年	1914 年	換算額面価格
		米価倍率	13113	262 円			米価倍率	2251	11258 円
		平均米価倍率	6891	137 円			平均米価倍率	2479	12397 円
		封書料金倍率	4000	80 円			封書料金倍率	2666	13333 円
1 円		発行年	1888 年	換算額面価格	10 円		発行年	1924 年	換算額面価格
		米価倍率	11543	11543			米価倍率	1071	10713 円
		平均米価倍率	8253	8253			平均米価倍率	1306	13063 円
3 銭		発行年	1906 年	換算額面価格	5 円		発行年	1937 年	換算額面価格
		米価倍率	3104	93 円			米価倍率	1280	6403 円
		平均米価倍率	3510	105 円			平均米価倍率	1183	5919 円
		封書料金倍率	2666	80 円			封書料金倍率	2000	10000 円
10 円		発行年	1908 年	換算額面価格	10 円		発行年	1939 年	換算額面価格
		米価倍率	3331	33317 円			米価倍率	1002	10025 円
		平均米価倍率	3231	32316 円			平均米価倍率	1095	10952 円
3 銭		発行年	1913 年	換算額面価格	500 円		発行年	1949 年	換算額面価格
		米価倍率	1970	59 円			米価倍率	9.5	4751 円
		平均米価倍率	2514	75 円			平均米価倍率	9.5	4750 円
		封書料金倍率	2666	80 円			封書料金倍率	10	5000 円

現在では考えられない2万、3万円に相当する額面の切手が発行されていたことになり、重量便、電信消印の多いことから納得いく面もあるが、そのほかの使用目的を調べてみたい気持ちにさせる金額である。更に、興味深いのがこれら高額切手未使用のカタログ値があまり高くないことである。例えば、1908年発行の神功皇后は額面を約3万円とすると今年のカタログ値が30万円と10倍程度の評価である。当時の封書料金3銭である菊切手3銭を換算80円としてとらえるとカタログ値は50倍の4000円となっているのが理解しにくい。高額

切手の未使用が多く残されているとは考え難いので、この切手の不人気によるのであろうか。いづれにしてもこのようなことを考えること自体、滑稽なことであるのかもしれない。

次に、前述したように表3の田沢切手の時期より戦後の時期まで米価に比較して封書郵便料金に限定してみる限り非常に高くなってきていることが明らかである。この傾向が郵政民営化が変化する中でどのように変化していくか留意して見ていくと同時に、もっと適切な換算尺度があったら、会員の皆様から教えていただきたい。(編集子)